



★の数は難易度を示します

はじめに.....2

第一問 ★ 中屋敷均「科学と非科学」.....6

第二問 ★ 辻信一「弱虫でいいんだよ」.....16

第三問 ★ 伊藤亜紗「目の見えない人は世界をどう見ているのか」.....26

第四問 ★ 渡部泰明「和歌史なぜ千年を越えて続いたか」.....36

第五問 ★ 池上俊一「すべてを歴史の相の下に」.....48

第六問 ★ 宮下志朗「モンテーニュ」／中山元「文化と文明」.....60

第七問 ★★ 馬場あき子「おんなの鬼」／松浦寿輝「己が影に釘うつてゐる」.....70

第八問 ★★ 寺田寅彦「案内者」／池内了「寺田寅彦と現代」.....82

アクセス一覧.....2
解説冊子

この本は、『入試現代文へのアクセス』シリーズ初の**実戦的問題集**として、**共通テスト対策用に編まれたもの**である。今までの『入試現代文へのアクセス』は、シリーズ全体で二二〇万部以上が受験生に受け入れられ、入試現代文への力をつける問題集の決定版として評価されてきた。その一方で、『入試現代文へのアクセス』シリーズで身につけた手法を、より実戦的な形で生かせるような問題集を求める声も多く寄せられてきた。そこで、最も多くの受験生が立ち向かうことになる共通テストの現代文の各問題に対応した『入試現代文へのアクセス 共通テスト編』を刊行することとなった。『入試現代文へのアクセス』シリーズに携わった執筆陣によるもので、実戦的な問題集ではあるが、「わかりやすさ」と「使いやすさ」というシリーズの特徴を堅持しながら編まれており、その点で、単なる模擬問題集とは異なっている。

なお『入試現代文へのアクセス』という、シリーズの表題は、

きちんと筋道を通して、入試現代文の正解に迫るⅡアクセスすること を意味する。

この問題集は共通テストの第1問、評論（Ⅱ論理的な文章）の問題に対応した8題で構成されているが、『入試現代文へのアクセス』の『基本編』もしくは『発展編』を学習した上で取り組むと、より効果的である。

本書は特に次のような諸君に最適である。

I 『入試現代文へのアクセス 基本編』もしくは『発展編』を終えて、共通テスト用に、より実戦的な力を養いたい。

Ⅱ 共通テストの過去の問題に取り組んだものの、混乱が生じてきて調子が悪いので、共通テスト対策の基本から実戦までの指針を確認していきたい。

本書の特徴

① **本文と設問のわかりやすい解説。** 文章を読む力を養うための「**本文の解説**」と、それに即した解答の選び方を「**設問の解説**」でわかりやすく示すことに全力をつくした。

② **必要にして十分な語句解説。** 現代文、特に共通テスト問題特有の用語の意味がわからずに苦しんでいる諸君のために、本文に出てくる重要語の「**語句の意味**」について、各問題の解説の最初に示し、既存の『入試現代文へのアクセス』シリーズで取り上げられたキーワードについては、本文中に★印をつけた上で、解説冊子88〜95ページにまとめて、詳しく説明した。

③ **重要なメッセージ**「**受験生へ**」。多くの受験生が悩んでいる、共通テスト問題に取り組む際の心構えや注意点、あるいは課題の文章に関する知識や、キーワードの解説などを、「**受験生へ**」という題名で「**本文の解説**」の後に載せてある。

④ **基本的な読解のポイント**「**読解へのアクセス**」。特に、「**本文の解説**」では、既存の『入試現代文へのアクセス』シリーズで用いた「**読解へのアクセス**」を兼用し、シリーズ全体で、文章を読む際の具体的な指針を一貫させている。

⑤ **解法のポイントⅡ「共通テストへのアクセス」**。既存の『入試現代文へのアクセス』シリーズで用いた〈正解へのアクセス〉には、記述問題用の指針が多く含まれていた。そこで本書では、選択肢問題だけで構成される共通テスト用にこれらを再編成しつつ、新たな指針を追加して、共通テストへの取り組みに苦勞している諸君のために、『設問の解説』の中で〈共通テストへのアクセス〉という形で示し、ていねいに解説した。

⑥ **幅広く高度な読解力に結びつく文章選択**。流動的な共通テストの傾向に対応できるよう、多様な分野の文章、しかも面白いものを載せることをこころがけ、共通テストに対応した力が総合的に養成されるように設問を練り上げた。

⑦ **直前期の心構えⅡ「直前期の受験生へ」**。共通テスト直前期に不調を訴える生徒が多いので、〈受験生へ〉の延長ではあるが、解説冊子の最後に最終的な調整のアドバイスを列挙した（直前期の受験生へ）の内容は「評論編」も「小説編」も同じである。

⑧ **アクセスやキーワードの一覧と、語句索引**。解説冊子の最初に〈読解へのアクセス〉と〈共通テストへのアクセス〉の一覧、巻末の「確認しよう」に、既存の『入試現代文へのアクセス』三部作に出て来た主要キーワードの一覧、さらには「本文の解説」に出て来た「語句の意味」の語句索引を載せてある。

⑨ **文章中の表現についての配慮**。本書の中には、現代において不適切と思われる表現を含む文章も見られるが、時代性を考慮してそのままにしてある。その一方で、今日あまり見かけなくなった送り仮名や表記については、あえて現代の標準的な形に変更したものもある。

本書の使い方

① **本書は、問題冊子と解説冊子で成り立つが、まず自力で問題冊子の問題を解いてみよう**。各問題の解答時間は20〜25分が目安だが、特に前半の問題は、時間をあまり気にせずじっくり取り組んでもよい。

② 解き終えたら、解説冊子の「語句の意味」で基本語句の意味を押さえ、語句の知識を確認する。

③ 「本文の解説」を読み、自分の読みをチェックする。〈読解へのアクセス〉は特によく理解し、今後どういう点に注意して文章を読めばよいか確認しよう。

④ 「受験生へ」に書かれたメッセージをよく読み味わう。

⑤ 「設問の解説」を見ながら解答をチェックする。正解か不正解かだけにこだわるのではなく、正解しても解答の筋道が正しかったか「設問の解説」を見てしっかり把握してもらいたい。〈共通テストへのアクセス〉は特によく理解し、共通テストへの順応力を強化していくこと。ましてや不正解だった場合は、より細かく設問の解説を読み、解法を理解してもらいたい。

⑥ **しばらく時間をおいてから復習する**。過去の共通テスト問題に取り組んだりしながら、調子が悪くなった時などに、もう一度この問題集の問題を解き直し、〈読解へのアクセス〉〈共通テストへのアクセス〉に焦点を当てながら、解答の指針を確認してもらいたい。解説冊子の最初にある一覧表を利用し、ウィークポイントを特に自覚して、何度もチェックしていくとよいだろう。

⑦ **直前期になったら、特に解説冊子の最後にある「直前期の受験生へ」などを参考にしながら、本書を読み直し、最終調整していこう**。

**読解
への
アクセス**

第一問
第二問
第三問
第四問
第五問
第六問
第七問
第八問

※「入試現代文へのアクセス 基本編・発展編・完成編」に掲載

共通テスト
への
アクセス

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦
複数デフストによる問題では、文章や資料を関連付けながら正解を選ぼう	設問が複数の文章にまたがる場合は、それぞれの文章の共通点と相違点に注意しよう	漢字の問題では同音異義語に注意しよう	設問に関わる本文中の箇所（解答ポイントとなる箇所）を限定しよう	傍線部やその前後と同じ話題や語句の出ている箇所に注目しよう	選択肢同士を比較検討し、よりよい解答を選ぼう	筆者独自の言葉や表現の意味を正確に理解しよう	傍線部に特徴的な表現がある場合には、その表現の意味合いやニュアンスに気を配ろう
						○	○
			○	○	○		
○	○	○	○	○			
○			○	○	○		

⑥	⑤	④	③	②	①
本文に書いてあるから選ぶのではなく、設問に対する説明として適当かどうかを考えて正解を選ぼう	解答の根拠を見つけにくいとらえかたのない問題では、本文全体の主旨に即して解答を考えよう	正解ポイントや本文内容に反する（＝矛盾する）選択肢を消去していこう	傍線部の前後の文脈をよく確認し、解答の方向を見極めよう	設問をよく読み、何が問われているのかを正確につかもう	傍線部に指示語がある場合、その指示内容を押さえよう
○	○	○	○	○	○
		○	○	○	
				○	
			○	○	○
○		○	○	○	○

第一問
第二問
第三問
第四問
第五問
第六問
第七問
第八問

問2 傍線部には、「それ」という指示語が含まれており、正解にたどり着くには、「それ」に該当する内容を読み取ることが不可欠である。

共通テストへのアクセス①

傍線部に指示語が含まれる場合は、その指示内容をもつて押さえよう

傍線部の「それ」は、直前の内容(29〜32行目)を受けており、次のように整理できる。

- a 日本語は、言語として生命力を持ち続けている
- b 英語の使用を盛んにする状況が進めば
- c 言語としての力が実質的に失われていく

以上の内容を含む、③が正解。「英語を優先して……より強まれば」がbに、「日本語が……危ぶまれる」がaを踏まえたcに該当する。なお、選択肢末尾の「……否定できない」は、傍線部の「まったくあり得ない話ではない」に対応している。

他の選択肢は、以下のとおり。

- ①「英語の使用が義務化されている」とまでは、本文で

における、「開かれたこと」の役割として、

- a 情報の交換や物資の流通などにおいて、現代社会の発展に寄与している

ことが読み取れる。

ただ、ここで見落としてならないのは、筆者は、現代社会のあり方を、全面的に肯定しているわけではないという点である。これに関しては、傍線部直後に着目する必要がある。

共通テストへのアクセス③

傍線部の前後の文脈をよく確認し、解答の方向を見極めよう

53〜63行目には、「あらゆるものを混せて競わせ」、特に経済的な効率を追求する「現代社会」のあり方に、筆者が、次のような疑問を抱えていることが示されている。

- b 限られた観点で見た優位性を競わせると、独自性のある多様な文化を失う恐れがある

明示されていない。また、日本語が実質的に失われて保存されたとしても、「消滅する」わけではない。

- ② 傍線部の「それ」は前の一文の内容を指しており、直前の「英語を第二公用語として認定」という内容を指してはいない。また、「日本語より論理的な英語」も、本文とは無関係。

- ④ 傍線部の「それ」には、「学問や芸術を含む」日本の文化全体」のことは含まれていない。また、日本文化が「西洋的な文化に組み込まれてしまいかもしれない」も本文ではふれられてはいない。

問3

まず、問われているのは傍線部そのものの意味や内容ではなく、こうしたことを言い募るような「現代社会」に対する、筆者の考え方であることを押さえよう。

共通テストへのアクセス②

設問をよく読み、何が問われているのかを正確につかもう

そこで、設問にある「現代社会」に着目すると、13行目に、「開かれたこと」と「現代社会」の関係が述べられていることがわかる。さらに、9〜14行目からは、「現代社会」

こうしたa bを含む、④が正解。

他の選択肢は、以下のとおり。

- ① 後半の「消費者や企業を……追求される」が、誤り。現代社会では、消費者や企業の利益を重視しがちであること(58〜60行)が述べられている。

- ② 仮定の話として日本文化の影響にふれた部分はあるが、「日本文化」が、「かつては圧倒的な影響力を持っていた」とは述べられていない。

- ③ 「開かれたこと」の意義は、筆者が述べているのであり、「自ずと人々」が、その「大切さを意識するようになって」いるわけではない。

問4

傍線部の「カビが生える学問」に関しては、冒頭の段落でも述べられている。自称「カビマニア」、すなわちカビの研究に熱意を抱いている人々が、国際学会の会議場で、一堂に会している。ここでは、「古き良き時代のサイエンスの芳香が漂っている」(8行目)と、傍線部に対応する表現がある。読解へのアクセス⑥に従い、「芳香」と「薫り」という、同じような内容の言い換えに注目しよう。このように、自ら取り組んでいる学問に「古き良き時代」の香りを感じるとするのは、筆者が、以下のような考え方をしているからである。

現代社会において、「開かれたこと」を善とする価値観が実現となったことは、学問のみならず、さまざまな領域で発展と激しい競争をもたらした。だが一方で「閉じられたこと」には大きな可能性がある。すなわち、外界から遮断された濃密で小さな世界において、独自のものが醸成・成長していくのである（34～49行目）。芸術で言えば「描いては消し、消しては描く」といった試行錯誤の過程を、筆者は「無駄で贅沢な作業」と評価している（45～52行目）。そして、こうしたところに「古き良き時代のサイエンス」「カビが生える学問」との共通性を感じているのである。以上から、傍線部に込められた筆者の考え方は、

- a 熱心な研究者たちが
- b 外界から遮断された濃密で小さな世界で
- c 独自のものが醸成・成長していくことを
- d 試行錯誤を繰り返し、時間をかけて進めていく
- e a～dが好ましい学問のありようである

と整理できる。

こうした内容を過不足なく説明している、③が正解。他の選択肢は、以下のとおり。

① b c が欠けている。また、「同好の士にとって興味深

る。

共通テストへのアクセス⑤

解答の根拠を見つけにくいとさえころのない問題では、本文全体の主旨に即して解答を考えよう

本文は、「カビが生える学問」の話題から、さまざまな領域に関して、「開かれたこと」と「閉じられたこと」の意義や問題点を指摘しつつ、最後に「カビが生える学問」の話題に戻り、全体を締めくくっている。こうした、本文全体の構造と、筆者の姿勢といったことを踏まえ、選択肢を順次、検討していこう。

① 「前者」⇨「開かれたこと」を「無意味なものではない」としている点が誤り。著者は「開かれたこと」について、その意義も認めている（9～14行目）。

② 本文は、「カビが生える学問」の話題で始まり、かつ、その話題で締めくくられており、その間に、文化や芸術など様々な分野における、「閉じられたこと」の意義や可能性が論じられている。したがって、これが正解。

③ 筆者は個人的には、自らの学問のあり方を好ましく思っている。しかし、学問のあり方を「文化や経済などに對しても応用できるか否か」という問題について詳細に

いものに感じられる研究」であれば成果が生じるというのも本文にない。

② 筆者は自らの学問を「閉じられたこと」の意義に即して述べている。したがって、「閉じられた研究」ではなく、「開かれた研究を目指す」というのは、本文の主旨に反する内容である。

選択肢を吟味する際には、本文の表現との細かな異同に拘泥せず、本文の内容・主旨や正解ポイントなどと、重要な点での食い違いがないかにまず着目しよう。

共通テストへのアクセス④

正解ポイントや本文内容に反する（⇨矛盾する）選択肢を消去していこう

④ 「カビが生える学問」を「一つの国の独自の文化の中」で行っていくべきだとは、本文で述べられていない。

問5

「この文章に関する説明」が求められている。このような設問では、あらかじめ特定の内容を想定して、選択肢を吟味することはできない。こうした、解答の根拠がすぐに分からない場合には、本文全体の内容や主旨（筆者の言おうとしていること）から答えを判断することが大切であ

検討してはいないので誤り。

④ 筆者は「日本文化に対する」「郷愁（⇨過去をなつかしむ気持ち）」を示してはいないし、「古き良き時代に回歸するための様々な具体的方策をも提示している」わけでもないの、誤り。

⑤ 「カビの生えたような学問」と「カビが生える学問」との「微妙な相違」に関しても、また、「前者」⇨「カビの生えたような学問」を「開かれたこと」と重ね合わせることにしても、本文から読み取れない。

【解答と配点】（45点）

問1	(ア) ③	(イ) ②	(ウ) ④	(エ) ①	(オ) ③	2点×5
問2	③					8点
問3	④					9点
問4	③					9点
問5	②					9点